第 5 節　移民、接触、混淆

翻訳研究と、接触の社会言語学

第5節第1項　ココリーチェと南アメリカのイタリア移民

前節で考察したような、近代の翻訳論や翻訳実践に見られる、言語構造、言及指示機能、標準変種のみへの焦点化は、ピジンなどの言語変種についての――前節で翻訳と関係が深いことを示唆した接触言語変種についての――社会言語学的知見を参照項として導入した場合に明らかになるように、極めて社会階層的、階級的、ひいては人種論的な偏向を示すものでもある。

たとえば、Calvet（2006［1999］: 164-165）によれば、かつてのブエノスアイレスでは、イタリア移民、つまりイタリア標準語ではなくイタリアの諸方言（特に南イタリアを中心としつつ、イタリア全土にわたる諸方言）を話す移民たちは、これらイタリアの諸方言とブエノスアイレスのスペイン語諸方言の間の連続的混淆体を成す「ココリーチェ」（cocoliche）を発達させ、ココリーチェを用いて他の（相互的な理解可能性が必ずしも高くない）イタリア方言の話者、そしてスペイン語話者たちとコミュニケートしていた。このように、非標準諸変種は、変種間の差異や多様性が顕著であるため、非標準諸変種の話者たちが共存するような状況（定住植民地／接触ゾーンのような環境=コンテクスト）では、一般的にいって、移民たちが話す非標準諸変種間のリンガ・フランカ（コイネー諸変種）が生成される必然性が高い。また、そのようなリンガ・フランカは、移民労働者たちが、移民先（この場合はブエノスアイレスで主流派を成す社会集団や職場など）で交流する必要のため[73]、彼ら彼女らが移民先で日常的に用いる言語変種であるスペイン語の地域諸方言の諸要素も取り入れて、連続体を成して形成される傾向にある[74]。

それに対して、イタリア標準語（となるものに、より近い変種）を用いる移民たち、すなわち、より高い階級や階層に属するイタリア移民の集団は、ピ

ジン的混淆言語連続体であるココリーチェを発達させず／用いず、彼ら彼女らは、（プロト）イタリア標準語とブエノスアイレスのスペイン語、これら両者を、（上層インド標準英語変種にも見られるような、ある程度の相互転移／コード・スイッチング／混淆は示しつつも[75]）2つの明瞭に区分された言語体系、異なったコード・システムとして保持したという。そのようにして、彼ら彼女らはココリーチェ=混淆変種の不使用により、自らの集団の階級的、非労働移民的アイデンティティ／ディスタンクシオンを示したのである。つまり、ココリーチェの使用／不使用は、イタリア移民たちの階級的差異を指し示す社会指標性を担っていたといえる。いわゆる「翻訳」というものが、それに関わる2つの「言語」を異なったコードとして前提的に指標するかぎり――つまり、それに関わる言語が異なったシステムを成すことを前提とした営為であるかぎり――それが、どちらの階層（労働移民と上層移民）、そしてどちらの変種（地域諸方言と標準語）と結びついた実践であるのか、そして、どのような社会指標性を帯びた実践であるのか、加えて、そのような社会的負荷を負いながらそれから目を背け、言及指示機能に、言語構造に、標準変種に焦点化した実践であるのか、それは、わざわざ述べる必要もないであろう。

ココリーチェとその社会史的コンテクスト

まずは以上を確認したうえで、以下では、アルゼンチンにおけるイタリア語とスペイン語との混淆変種などを取り巻く、よりマクロな歴史的文脈、特にブエノスアイレスのような大西洋岸の南米の大都市へのイタリアやフランスからの移民の一般的状況について簡単な解説を加えておく。まず、イタリア標準語は、主に、20世紀に入ってからイタリアで展開する言語計画の産物であると思われるため、19世紀後半にアルゼンチンへと移民した者たちに、この変種の話者が（多く）いたとは厳密にはいえない。Haller（2002［1997］: 121-122）によれば、イタリア統一時（1861年）、トスカーナ語／方言に基づくイタリア標準語をしゃべることができた者は総人口の2.5％ほどという説、あるいは、それより多い9.5％ほどがしゃべれたとする説など諸説ある。また、標準語の使用と強く結びついていると思われる識字率に関しては、1861年の非識字率はイタリア全体で75％、1911年で40％、1951年で14％であったとされている。